

# 日本統計學史考

——森 林太郎博士の統計觀について——

林 文 彦

## 序

ウェスターガードによれば、統計學は三つの源泉をもつといわれている。一つは十七世紀に主として獨逸に勃興した國狀記派 *Statenkunde*、その二は右と殆ど時と同じくして英國に創始された政治算術 *Political arithmetic*、その三は十六世紀頃イタリアに端を初し、のちフランスにおいて大成された確率論である。

統計學が輸入科學として日本に渡來してここに九拾餘年、統計學は科學一般に種々適用され甚大な効果を收めつつある。いまふりかえつて「統計」及び「統計學」がどの様な形で又いかなる名稱を以て輸入當初において迎えられたかを考察するのにもあながち無駄ではないと考へ、ここにその史的考の一端を示さんとするものである。

本考においては、まづ「統計」と「統計學」の譯字考、次に「統計學」を國家の顯著事項を記述するいわゆる國狀記述派的なものとして輸入された事實、最後に方法論的立場から、「統計學」を把握認識した森林太郎の統計觀を叙述するものである。

「統計」及び「統計學」の譯名の考證には穂積陳重、岡松徑及び下出隼吉の三氏があげられる。

まづ穂積陳重によれば、「<sup>(一)</sup>「スタチスチックス」の譯名が「統計學」と定まるまでには多少の沿革がある。始め慶應三年四月に出版せられた神田孝平氏譯「經濟小學」の序には、スタチスチックスを譯して「會計學」としてあるが、明治三年二月發布の「大學規則」には「國勢學」とある。……同年十月の大學南校規則にも「國務學」となつて居る。世良太一君の直話に據れば、國勢學を一時「知國學」とも言うたことがあるが、これは多分杉亨二先生の案出であるところのことである。津田眞道先生がオランダのシモン・ヒッセリングの著者を譯して明治七年十月に太政官の政表課から出版せられたものに「表紀提綱一名政表學論」といふのがある。「西周傳」に據れば、津田先生は學名としては「綜紀學」と言ふ語を用ひられた様である。世良太一君の話に據ると、「政表」といふ語は、此後明治十年頃までも用ひられたといふことである。

此の如くスタチスチックスに對する譯字が從來區々であつたので、寧ろ原語其儘を用ひた方が好からうといふことで、明治九年頃、杉亨二博士、世良太一氏等の創められた學會には、「スタチスチックス社」といふ名稱を附し、「スタチスチックス雜誌」といふのを發刊せられたが、當時スタチスチックスといふ原語に宛てる爲に「<sup>スタチスチック</sup>抄契」といふ漢字をも案出創造せられたといふことである。……然らばこの「統計學」といふ名稱の創始者は抑々何人であろうか。明治四年七月二十七日大藏省の中に始めて置かれた役所に統計司といふのがある。これは翌八月十日に至つて統計寮と改められたが、官署の名に統計の名を附したのは之が始めてである。この「統計」の二字は、恐らくは「英華字典」にスタチスチックに對して「統紀」といふ譯字を用ひて居つたのに據つて案出したものであろう。此後明治

七年六月になつて、箕作麟祥博士が佛人モロー・ド・ジョネの著書を翻譯して文部省から出版せられたものには「統計學一名國勢略論」といふ標題を用ひられた。學名として「統計學」といふ名稱を用ひたのは蓋し此書を以て初めと爲すべきである。而して前にも述べた如く、此後にも「國勢學」、「知國學」、「政表學」又は「表記」「移升致」などの名稱が存在したにも拘らず、後には「統計學」といふ名稱が一般に行はれて、終に學名と定まるに至つたのである。」

この考證のでている「法惣夜話」の序は大正四年七月である。ところが岡松徑の「統計譯字の略考」は穂積博士の考證と深い關連がある。すなわち「本年（大正四年―筆者註）五月二十六日阪谷會長閣下は書を徑に寄せられて曰く穂積博士より統計學と言ふ譯語は誰が始めて用ゐたるやの尋あり調査して一報を願ふと因て徑は統計界の耆宿たる本會（東京統計協會―筆者註）評議員世良太一君に面し明治四年より十年一月まで大藏省に統計寮存在のことを擧て當時大藏省に於て誰が統計の譯字を選定せしや定て御記憶あらんと述べました處同君答て曰く統計寮最初の頭は中村清行君（後國立銀行頭取）でしたが暫時にして罷め深江順暢君代られ癡寮の時まで従事されましたが統計命名のことは兩君ではなく明治三四年頃各省の職務章程を立案せし委員様の人輩が協定したものと老へますが誰が選定せしと言ふ記憶はありません幸に本會監事石橋重朝君は永く大藏省に居られたことがありますから多分承知のことと思ひますと是に於て徑は石橋君を訪問しました處同君多忙の時間を割かれ快く舊時の記憶を話されましたので徑は是の談を記載の左の通會長閣下に答申致したのであります。

石橋重朝君曰く僕の知る處では本邦に於てスタチスチックを始めて統計と翻譯し命名せるは明治二年開成所英學教師（當時年齢三十歳位と見受く明治三年肺病にて死去し舊幕府の人と覺ゆ）其の編纂にて統計入門と覺ゆ或は統計便覽とも覺ゆるが凡そ十行二十字詰にて三四十枚の出版物あり之を統計命名の創初とすべきか此の小冊子は僕が明治二年

開成所の學生たりしとき一度閲覽せしことあり復た此の緒言中に譯字不完全と考ふるも暫く假定し置くと言ふことも記憶して居る只今一寸其の氏名を思ひ出せません此の事に加藤弘之辻新次君に尋ねられたら知れるだらふと思ひます。」とある。

(11)  
ついで 一、統計なる譯字 二、政表なる譯字 三、表紀なる譯字 四、形勢なる譯字 五、國勢なる譯字の五つにわけて考察し、「最初スタチスチックスを統計と譯せしは英華字典を折衷せしものかと推察するのですあります今英華字典を見ますと Statistics を國紀、國志とし Science of Statistics を國學、國知とし a Statistical Account を統紀としてありますから我邦統計の譯字は此の統紀の紀を計と換えたのではありますまいか」と述べている。

(12)  
下出隼吉の「統計」及び「統計學」に就いて」によれば、「『萬國政表』は萬延元年に出版され、岡本約博卿(古川政雄と同人)の譯になり本邦に於ける統計に關する文献としては餘程古いものゝ様に思はれる。此の書の凡例に據れば始め福澤先生(筆者註—福澤諭吉)が同書の翻譯に着手……政表なる譯語は多分福澤先生が渡米前即ち安政年間に新案されたものではなからうかと思はれる。之に續いて譯された言葉としては、Statistics を表書、表紀、形勢、綜紀、綜計(明治八年司法職制章程に毎歲刑事民事綜計表を上り言々とあり)、製表(東京統計協會は最初製表社と言へり)、國勢等に譯してあり、更に又國紀、國志、國知等にも譯されて居り、此の様に色々と譯し直された様ではあるが、比較的多く用ひられたしは「政表」の二字の様であつた。」とし、更に「統計學」については、「箕作麟祥氏が統計學と改め譯されし迄にも、既に學としての Statistics は色々と譯されて居り、例へば經國學(ヒイッセリ)が教授の西、津田兩先生に與へた覺書の翻譯文にあり、ホフマン教授又は西先生の何れかが譯したと言はれる)、政表學、綜紀學、形勢學(明治二年の大學々制中にもあり)、國勢學(明治三年發布の大學規則中にあり)、國務學、知國學(杉先生の譯とも言はれる)、表學(慶應三年出版加藤弘藏譯『西洋各國盛衰強弱一覽表』にある津田眞道の序

文……實は柳河春三の筆なりとも言はれる……にあり)、會計學(慶應四年三月版刻の神田孝平譯『西洋經濟小學』の序文にあり)、表紀學などと呼ばれしが、其の多くは之に類するものゝ多く、次第に統計及び學の單なる政治的意味のみを有するものに非ずして、其の本義の如何が邦人に知らるゝに至りしと共に、之等の譯は何時しか忘れらるゝに至りしが、あとに残りし統計及び統計學に對しても尙暫らく議論のあり、了解されざれしことは言ふ迄もなく、實作先生の譯本に『一名國勢略論』とあるを見ても、杉先生が「統計」は其の眞意を表はさずとして、「抄対欸」又は「抄智契」或は「抄対欸」なる言葉を創造案出せられ、明治九年に創設せられし統計學社は最初表紀學社と稱し、後「スタチステッククス社」と改め、統計學社と改稱せられしは二十五年なりしを見るも譯語に就いては色々と異存のあり、容易に一定の學名としてかたまたざりしは窺ふに足る……と記している。(四)

(一) 穂積陳重 法窓夜話 一九一—一九四頁

(二) 岡松 徑 統計譯字の略考 統計集誌第四百十四號 四七頁

(三) 同右 四八一—四九頁

(四) 下出隼吉 表紀提綱解題 二二—二三頁 明治文化全集經濟篇所收

## 二

政表という語を用いて「統計」を示した最初のものは、萬延元年(一八六〇年)十一月、福澤諭吉が校閲し、岡本博卿が譯出版した「萬國政表」であろう。これはオランダ人プ・ア・デ・ヨングの蘭文「世界國勢一覽表」であつて、(五)慶應三年加藤弘藏(後の弘之)によつて譯出された「西洋各國盛衰強弱一覽表」と共に日本最初の統計關係書で

ある。しかし共にその内容からおして明らかなる如く現在の「統計數字」のことである。

しかし何等かの意味において社會科學としての「統計學」を意味するものとしては種々なる譯語が用意されたのである。

文久二年（一八六二年）オランダに派遣された日本最初の留學生、津田眞道（當時眞一郎）と西周（當時周助）とが和蘭ライデン Leyden 大學の教授フ、セリング Simon Vissering に師事したが、同教授の「津田眞一郎西周助兩君ニ業ヲ授ルコトニ就テノ書付」の第一條に次の五科目にわたる名稱を擧げている。

其一 天然ノ本分 Naturreget

其二 民人ノ本分 Volkenreget

其三 邦國ノ本分 Staatsreget

其四 經濟學 Staathuishoudkunde

其五 經國學 Statistiek

其五にあげてある「經國學」が「統計學」の譯語であり、その日付は一八六三年六月十六日となつてゐる。

フ、セリング教授によつて授けられたこの「經國學」を後年すなわち明治七年（一八七四年）十月津田眞道は「表  
紀提綱一名 政表學論」として譯出している。<sup>(七)</sup>

一方西周は「五科口訣紀略」に次の如く記している。

一曰 性法學

二曰 萬國公法學

三曰 國法學

#### 四曰 經濟學

#### 五曰 政表學

政表學とは「第五論政表學。是察一國之情狀如何。而致其詳密之術也。」<sup>(八)</sup>とあり、統計學を國狀記述派的な内容をもつたものであつたことが窺われる。

表紀提綱の序によれば「凡ソ土地人民ヨリ法度學問教化財政守禦及ヒ農業工作貿易物産航海運輸等ニ至ルマテ其變更事實ヲ表章シ或ハ彼此ノ比較ニ因テ其利害得失ヲ明辨スル者ヲ政表トス」<sup>(九)</sup>とあり、表紀の本義については「表紀ノ

原語ヲスタチスチキト謂フ其義ヲ直譯スレハ邦國又ハ形勢ト謂フ事ナリ蓋一國數國乃至萬國ノ人民互ニ相生養スル實際ノ形勢ヲ知ル學術ナリ此形勢ヲ名ケテ人間會社又人間仲間ト謂フ」<sup>(十)</sup>とあり、表紀の目的としては、「表紀ハ人間仲間

ノ事實ヲ知ル學問ニシテ其事件ノ現ニ存シ實ニ有ルヲ表章スルニ在リ」<sup>(十一)</sup>とし全く國狀記述派的な内容のものである。

更に慶應三年（一八六七年）神田孝平は、英國の經濟學者 W. Ellis の著 “Outline of Social Economy” のオランダ譯からの重譯として「經濟小學」を出版したが、その序に「西洋諸國學校ノ敎國各其法アリト雖小異大同之ヲ要スルニ五科ニ盡ク五科一曰敎科二曰政科三曰理科四曰醫科五曰文科各科亦門類ノ別アリト雖具錄ニアラス今特ニ政科ヲ詳ニス凡政科分ツテ七門トス一曰民法二曰商法三曰刑法四曰國法五曰萬國公法六曰會計學<sup>エカノチケフ</sup>七曰經濟學皆國家ノ急務ニシテ學者ノ忽ニスヘカサル所ノ者ナリ……」<sup>(十二)</sup>（傍點筆者）とある。

「經濟小學」は日本最初の經濟學の翻譯書であるが、六日會計學とはスタチスチックとふりがながつてあることによつても明らかなる如く統計學のことであり、その統計學は經濟學等と共に「國家ノ急務ニシテ學者ノ忽ニスヘカサル所ノ者」として考えられ、いうところの國狀記述派的統計學を指していたものと思われる。

明治七年（一八七四年）六月箕作麟祥によつてフランスの Moreau de Jonné 著 Elements de Statistique, 2. ed.,

1895 が文部省編として譯出され、「統計學一名國勢略論」と題されている。この譯書こそ統計學の學問名として用いられた最初であるが、その譯序ともいふべきところに、「此學原名ヲスタチスチックと言ヒ其說ク所ハ皆算數ヲ以テ國內百般ノ事ヲ表明シ治國安民ノ爲メ最モ緊急ノ者タリ……我國未タ此學科ノ書ノ世ニ翻譯ヲ經シ者アラサルカ故ニ今者取メテ此書ヲ譯シ以テ官梓ニ付スト雖モ其科名ニ填スル譯字ノ如キモ從來或ハ政表國勢等ノ字ヲ用キテ亦未タ一定普通ノ稱アルヲ見ス因テ此ニ改メ譯シテ統計學トス」とあり、「統計學の釋義及旨趣」として、「統計學トハ天然、人口、政事等ノ實件ヲ算數ヲ以テ解明スル學科ヲ言フ而シテ其旨趣ハ人民ノ性種、情態、進歩ヲ明ラカニ知得スルニアリ」とし、その大綱領として、

「第一 國ノ人種、人口及ヒ富盛ノ源ヲ證明スル事

第二 土地ノ肥瘠、往來ノ便利、外寇ヲ防禦スル要害、郊野都府ヲ問ハス水土ノ善惡及ヒ地形ノ寧否ヲ検査シ其地ヲシテ都テ良好ナラシムル方法ヲ施設スル事

第三 人民ノ盡力ヲシテ得タル政權及ヒ民權ノ執行ヲ確然不拔ノ基礎ニ從ヒテ規定スル事

第四 外寇ヲ防禦シ以テ國ノ獨立不羈ヲ保有スル爲メ兵士ヲ調發スルニ付キテ其人員ヲ公平ニ全國ニ科分スル事

第五 政府ノ用ニ供スル租稅ヲ公平ニ定ムル事

第六 農業及ヒ百工ニ因リテ生スル諸物品ノ分量ト價額トヲ知ル事

第七 商業ノ盛衰ヲ檢視シテ其障礙ヲ知ル事

第八 犯罪ノ多寡ヲ考ヘ以テ刑罰ノ輕重ヲ適宜ニシ治國ノ基本ヲ制スル事

第九 人民ヲ文明開化ノ域ニ進メ其心ヲ善良ナラシムル爲メ國中教育ノ盛衰ヲ知ル事

第十 貧困ノ民又ハ犯罪人ノ爲ニ設ケタル貧院、病院、獄舎、懲治場等ノ法則ヲ立テルニ付キテ官府ヲ資助スル事」<sup>(十五)</sup>

と列記し、「統計學ハ昔ニ國政ヲ掌ル者ノ爲ノミニ非ス法律家、經濟家、歴史家等ノ爲ニモ亦不可缺ノ學科」<sup>(十六)</sup>と考  
えられているが、きする所、その内容は依然政治算術派的、國狀記述派的なものである。

以上明治初期前後に「統計學」として考えられた内容はその表現に若干の相違はあるとしても國家學の一としての  
統計學であつたのである。

- (五) 尾佐竹猛 萬國政表解題 二頁 明治文化全集經濟篇所收
- (六) 幸田成友 和蘭夜話 八六―八七頁
- (七) 森 鷗外 西周傳 五〇頁 鷗外全集著作篇第十一卷
- (八) 同右 五一頁
- (九) シモン・ヒッセリング著・津田眞道譯 表紀提綱 序
- (十) 同右 三頁
- (十一) 同右 五頁
- (十二) 神田孝平譯 經濟小學 序一
- (十三) 箕作麟祥譯 統計學 凡例一
- (十四) 同右 卷之一 本文一
- (十五) 同右 卷之一 本文七―九
- (十六) 同右 卷之一 本文七

「明治三年二月、大學規則及中・小學規則を發布せられ」、その「大學規則」における法科の學科名に「國勢學」とあり、中・小學規則の「中學」の部、法科の専門學にも同様「國勢學」とある。<sup>(十七)</sup>  
<sup>(十八)</sup>

明治三年閏十月、大學規則に基いて、新に大學南校規則が制定せられ、その大學南校規則第廿五條に、「専門科分  
 一・二・三・四等トス共學科ハ大凡左ニ示スカ如シ」とあり、法科の學科中に同様「國勢學」とある。<sup>(十九)</sup>  
<sup>(二十)</sup>  
<sup>(二十一)</sup>

〔註〕 穂積博士の法窓夜話には「國務學」とあるが行文からみて（同年十月の大學南校規則にも、「國務學」「國勢學」であるのではないか。それとも別に異文獻があつたのであろうか。

下つて「明治十五年九月及十二月に於て、夫々學科課程の改正あり。九月に於ける改正は政治學及理財學科に關するものにして、第二年の課程に新に統計學を加へ」とあり、一年間毎週二時間の授業であつた。<sup>(二十二)</sup>（傍點筆者）明治十四年九月東京大學文學部に入學し、同十八年七月卒業した金井延は、同年十一月ラートゲン教師の助手となつた。このカール・ラートゲンは「明治十五年來朝し二十三年歸國して、獨逸マールブルク大學の教授となつた人であるが、彼は獨逸で歴史學派經濟學の影響を受けてゐた。東京大學の講義は行政學、國法學、統計學等であつたが」<sup>(二十三)</sup>（傍點筆者）「其の統計學の講義は今日の統計學とは違ひ、各國の國勢を叙述したやうなもので、Staatskunde とも言ふべきものであつたと言ふ」ことからも明らかなる如く名は統計學であつてもその實態は國狀記述派的なものであつたと考えられる。<sup>(二十四)</sup>

一方、中央統計機關としては明治四年（一八七一年）十二月廿四日付太政官正院に政表課を設置されたのが最初であるが、同五年（一八七二年）十月四日地誌課政表係に縮小され、同六年（一八七三年）更に五月日闕内史財務課

(「此課ハ一切財用ニ關係スル事ヲ勘査ス」)に附屬と再縮小され、同七年(一八七四年)三月五日外史所管の政表課となり、同八年九月二十五日日太政官の内外史および諸局課が廢され、五科が置かれるに至つて、「政表課ヲ廢シ尋テ第五科ヲ置キ政表事務ヲ管ス」ことになり、同十年一月十八日「太政官中ニ調達局ヲ置キ政表事務ヲ管ス」ことになり同局中の政表掛となつた。更に同十三年三月三月太政官中調査法制の兩局が廢され、法制・會計・軍事・内務・司法・外務の六部が置かれるに至り、政表掛を改めて統計課として會計部に所屬せしめた。以上種々その機構上の位置及び名稱が變更されたが、明治十四年五月三十日付太政官中に統計院を設置し、統計機構の一大擴充を見るに至つた。(二十五)

明治七年の政表課規程第一條によれば、「夫レ國家法ヲ立テ政ヲ行フヤ其効蹟ヲ察セサレハ焉ソ能ク事物ノ利害得失及國民安寧ノ域ニ進ムヤ否ヤヲ知ランヤ而シテ其効蹟ヲ察セント欲セハ全國ノ事實計數ヲ總括スル處ノ政表ニ依ラサルヘカラス……」とある。(二十六)

統計院事務章程は次の如くであつた。(二十七)

第一條 政治上其他諸般ノ事物ニ關スル統計表ヲ編製公布スル事

第二條 統計表ニ據テ政治上其他諸般事物ノ結果ヲ證明スル事

第三條 統計表ノ様式ヲ定ムル事

第四條 統計表ヲ編製スルノ材料ヲ各官廳其他ヨリ徵集スル事

第五條 各官廳其他ヨリ徵集スル報告書ノ様式ヲ定ムル事

第六條 報告書及ビ統計ノ材料ヲ徵集スルノ期附ヲ定ムル事

第七條 統計ニ關スル新古ノ書類ヲ集テ之ヲ保管スル事

第八條 各官廳ニ於編製スル統計ノ區域ヲ定メ其統計表若クハ統計ニ關スル書類ノ様式ヲ改良セシムル事

この様に統計院の設置に伴い、統計事務所管機構に飛躍的擴充がなされたが、これというのも次の如き參議大隈重信の統計治國の建議があつて力あつたのである。

「現在ノ國勢ヲ詳明セザレバ政府則チ施政ノ便ヲ失フ過去施行ノ結果ヲ鑑照セザレバ政府其政策ノ利弊ヲ知ルニ由ナシ故ニ現在ノ國勢ヲ詳明シ過去施行ノ結果ヲ鑑照スルハ是レ政府ニ在テ缺クベカラザルノ務ナリ……………現在ノ國勢ヲ一目ニ明瞭ナラシムル者ハ統計ニ若クハ莫シ又現在ノ國勢ヲ以テ之ヲ既往ニ比較シ過去施政ノ得失ヲ證明スル者ハ亦タ統計ニ若クハナシ是ヲ以テ政府夙ニ其大要アルヲ察シ太政官中ニ政表課ヲ設置セラレタリ……………抑モ統計ノ業タル施政ノ實務ニ遠離スルノ外觀アルガ爲メニ其材料ヲ有スル諸官衛ニ於テ報告徵集ヲ等閑ニ付スルノ弊ナキニアラズ又統計課ニ在テハ其任組ノ狭少ナルガ爲ニ充分ナル編製ヲ遂ルコト能ハズ是則チ完全ナル統計表ナキ原因ノ大ナル者ナリ故ニ願クバ……………一院ヲ設ケ銳意統計ノ業ニ従事セシメ……………其規模ヲ大ニシ且ツ内閣重官ヲ以テ其首長ヲ兼務セシメラレシコトヲ斯ノ如クンバ完全ナル統計總表ノ製出ヲ望ムベク政府始メテ現在ノ國勢ヲ容易ニ鑑照スルノ便ヲ得テ又過去施設ノ結果ニ就キ政策ノ利弊ヲ發見スルノ端緒ヲ得ベキナリ……………」(傍點筆者)

以上縷述した如く明治初頭前後における「統計學」は翻譯書においても官府においてもまた學校教科にその内容は國狀記述派乃至政治算術派的であつたのである。

しかしその譯語、あるいは國勢學、あるいは政表學、表紀學等々と容易に統一を見なかつた。

ここにわが國統計學史上最初の開拓者として名を留める人、杉亨二博士に言及しなければならぬ。

博士は「單に統計と言ふことに對しては政表とか形勢とか言ふ譯字を當てはめたが、一の學問を現はす名稱としてはスタチスチックなる語を其儘用ふべしとの説を長く主張したのである。」(二十九)

明治十九年四月「スタチスチックの話」と題する講演の中で博士は、「スタチスチックと言ふことは我國には耳新しき言葉なれば世人に聞きとりやすきやうに譯字を作て政表とか統計とか名稱を付けたる此譯字は支那の文字なれば文字の儘に讀み下して解する者多し政表と言ふは支那の書には見えずして其字面も亦穩當ならず統計の方稍々解し易し統計は合計の意味もあれども文字の通り統べ計るの義にて可ならんなど、牽強附會するより學問の道理を誤り事業を妨害するの甚だしきに至らんとす目に視て名の付け方のなき物には原名を唱へて「ランプ」と言ひ「テーブル」と言ふ目に視えざればとて學問上の原名には必ず譯字を付けると言ふ道理は聞えず又事物の道理さえ知れば譯名は何にてもよし勝手次第なりと言ふ妄論者あり文明世界の新興たるスタチスチックといふ立派なる原語があるに何の嫌やある醫學にては病名や藥名は多くの原語を用ふ又佛者の菩薩、彌陀と言ふが如き類も梵悟なり其意味深く譯字の當つべきものなきを強て附會せば本義を失ふて大なる誤りを來さん又統計なり人口なり之を英語や佛語に直譯したらば如何なる奇語となりて文明世界の笑とならん」と論じ統計學たる譯語に反對したのである。<sup>(三十)</sup>

かくの如く「譯字排斥・原語採用論者であつた」<sup>(三十一)</sup>博士は明治六年五月太政官參議宛の建議書中に「夫政表全國之形勢也、歐州名曰須多知數知以久……」<sup>(三十二)</sup>(傍點筆者)と原音にあわせて造字し、「明治十二年頃印刷せんとしたる雑誌の題號には寸、多、知、寸、知、久、を合綴して侈智智を用いられんとし又明治十六年七月より十八年十二月まで共立統計學校の教科目には侈智智の新字を用ひ其の講義に於ても原音を使用した」とのことである。<sup>(三十三)</sup>又明治九年二月博士を中心として設立された學社は、初め表記學社と稱していたが、同十一年二月スタチスチックス社と改名し、その機關雜誌の名稱をスタチスチックス雜誌としたのである。

ところが明治二十五年第六十九號より「スタチスチック雜誌」は「統計學雜誌」と改題したのである。改題に際し同社副社長世良太一の名で發表された「本誌改題緒言」によれば次の如く記されている。

『「スタチスチック」は一箇専門の學科にして人間社會凡百事物の現象を探討彙集し算數を文辭を以て其眞形を寫出して以て盛衰利害優劣を審定し現象の如何に據て其原因を搜索し竟に進化の秘蘊を發見せんと欲するものなり

「スタチスチック」の主旨此の如くなるか故に之に適當する所の譯字を得ること甚だ難しとす曩に政表表紀統計等の稱を下せりと雖僅に其一端を擧ぐるに過ぎず

我輩社を結ひ此學を講究し後又雜誌を發刊するに當り其譯字の爲めに世人の本義を誤認するものあらんことを恐れ常に原語を存して其主旨を明らかにせんことを務めたりしなり

然るに統計の稱年を経るに従い大に世に行はれ官府編纂に學校教科に其他新聞に報告に皆之を用ひざるはなし原語の如何に拘らず既に一定の名稱となり復た働かすべからず時運既に此に至る我輩同志は益々之を輔翼し其發達を謀らざるべからざるなり

我輩夙に社を結ひ講究する所を載せて雜誌となすもの亦此學の擴張を冀ひ普く其主旨功用を世間に傳へんが爲なり然るに廣く世に行はるゝ所の名稱に依らずして獨り尙原語を固守するは善及の方便を得たりとせず且や萬一世人統計と「スタチスチック」と岐して別物となすが如きことあらば實務の進歩を障礙すること無きを保たずとして原語採用論者の主催する學社も遂に時運にかたずここに最後の牙城もくずれさり、ここに統計學についての學問的名稱は統一を見るに至つたのである。

しかし事態がそこまでゆく一動因として、明治二十二年同社の幹事今井武夫と森林太郎との間に統計の譯語について數次に亘る論争のあつたことを見逃すことはできない。

- (十八) 同右 六二頁  
 (十九) 同右 六五頁  
 (二十) 同右 一四〇頁  
 (二十一) 同右 一四一頁  
 (二十二) 同右 七〇二頁  
 (二十三) 河合榮治郎 明治思想史の一斷面 八二頁 河合榮治郎選集九卷  
 (二十四) 同右 八二頁  
 (二十五) 總理府統計局八十年史稿 五一九頁  
 (二十六) 法規分類大全第一編文書門 四九頁  
 (二十七) 法規分類大全第一編文書門 二一三頁  
 (二十八) 總理府統計局八十年史稿 一五一—一六頁  
 (二十九) 高野岩三郎 改訂増補 社會統計學史研究 二五〇頁  
 (三十) 世良太一編 杉先生講演集 一三七—一三八頁  
 (三十一) 高野岩三郎 前掲書 二五二頁  
 (三十二) 世良太一編 前掲書 附録 四〇頁  
 (三十三) 阿松 徑 前掲論文 四九頁  
 (三十四) 統計學雜誌 第六十九號 六頁

## 四

明治二十一年より二十二年に亘り獨逸のエステルンの論説を吳秀三が「惠氏醫學スタチスチック」と題し譯出した

ものをスタチスチック雜誌に連載した。これを單行本「醫學統計論」としてスタチスチック社より發行された。

問題は森鷗外こと林太郎が「醫學統計論の題言」として明治二十二年二月「東京醫事新誌」第五百六十九號に掲載したことから始まる。「余が醫學統計論の題言を作りし後、書を東京醫事新誌局に寄せて、何故に余がスタチスチックと云はずして統計と云へるかを問ふものあり。問ふものは名を匿したれば誰やらん知るに由なけれども、近來譯字の選擇なども追々輕忽にせぬ様になりて、免角議論あるは喜ぶべきことなれば、思ふが儘に左に述べん」と記し、論争の火端を切つた。「余が統計と云ひしは、必ずしもスタチスチックと云ふを欲せざるが故に然云へるにあらず。芳溪吳君が醫學統計論の首に數語を題してよと需められしより、同君の使はれたる譯を使ひしまでなり。然れども若し余にして統計の譯を惡しと思ひならば決して之を襲用せざりしならん。余はスタチスチックを統計と譯するの不可なるを見ざるなり。」<sup>(三十五)</sup>として原語採用論者に對して次の如く反論する。

「今の世の統計家―否、スタチスチャンと稱する人々の統計の語を不可とする理由を問えば、「統計は合計の意味もあれど、文字の通り統べ計るの義にて可ならんなどと牽強附會するより、學問の道理を誤り、事業を妨害するの甚だしきに至らんとす」と。是に慮の遠きに過ぐると云ふものなり。理學と云へば物象理窟の學問と思ひ、化學と云へば妖怪變化の學問と思ふと唱へ、此譯字を排斥せば誰か之を笑はざらん。若し反對者の位地に立たば、「スタチスチックは國家の字より轉じ來れば、國家の義又は政治家の義にて可ならんなどと牽強附會するより」云々と駁論することを得べし。」<sup>(三十六)</sup>とし、「若しスタチスチャン諸家に一步を譲りて、理化學等には誤解の弊少なく、統計には此弊多し。故に統計の語を避け、此權謀を以て流俗の弊を救はんとの意なりとせんか、余は、其權謀の能く其目的を達するや否やを知らざるなり。」<sup>(三十七)</sup>

原語採用論者が「スタチスチックの字を用ゐる理由を問えば、則ち曰く、「目に見て名の付け方のなきものには原

名を唱へてラムブと云ひテェブルと云ふ。目に見えざればとて學問上の原名には必ず譯字を付けると云ふ道理は聞さず。」と。又曰く、「醫學にては病名や薬名は多く原語を用ゐる。又佛者の菩薩、彌陀と云ふが如き類も原語なり。其意味深く譯字の當つべきものなきを強いて附會せば、本義を失うて大なる誤を來さん」と。蓋し目に見える物即ちコンクレートの物にも、目に見えぬ物即ちアブストラクトの物にも、譯の行はるる物と行はれ難き物あり。彼のラムブを燈と譯する事の行はれざるは、行燈と混ざる憂いあればなり。テェブルを机と譯する事の行はれざるは、我邦に有り觸れたる机と混ざるの憂いあればなり。統計に至つては此等の憂いなし。」とし統計學の輸入科學としての性格を強調し、更に原論採用論者が意味をもつとしてもシラブルの長い語は其儘にては行はれない點に言及し、「スタチスチックの字も長きに過ぎては行はれ難し。強いて之を行はんとすれば訛謬をなさん。「學問上の原名には必ず譯字を付けると云ふ道理は聞えず」という原語採用論者に對して、「譯字を付けぬと云ふ道理も聞さぬなり」と皮肉つてゐる。(三十九)

次で「統計に限りて何とやら艱澁なる意味あるの念をなすは、意味の變遷と云ふ事を知らねばなり。古代の用語は依然として存するに、學問の進歩は止む時なく、新しき意味を古き語の中に推し込むこと是なり。統計に六十乃至百の釋義ありと云ふは、統計の事に就きて古來、様々の變遷ありて、様々の意味をスタチスチックと云ふ語の中に推し込みしと云ふに過ぎず。」(四十)

スタチスチシャンが、「スタチスチックを統計なりなど云い張らんとする學者をば一々論破して、是れぞ我が持論なる十年の前に溯りてスタチスチックの歴史に就て其義を探究して、數多の學者をば一々論破して、(四十一)

統計なりと、證を引き質を擧げて、己の主義を主張するの勞を取られねばならぬ事と思ふなり」との論述に對して、「スタチスチックを統計と譯したるの可否を定むるには、之を今の統計の一釋義に照らして其吻合するや否を見て可なり。何を苦しんでか又古來の數百家に對して論辨を逞しうるするの煩を取らんや。」(四十二)

と、その消極的批判を終り、

森林太郎自身の統計觀を次の如く述べてゐる。

「今の統計の一釋義は何如。曰く、オンケン所謂物的歸納オビエクトイナの一理法、乃ち是なり。……スタチステシヤンは以爲へらく、「スタチステックの學問は實地經驗の學科にして、其方法にて穿鑿したる現象即ち事實を説明し、其原因を搜求して天法を知るを目的とす」と。所謂天法は余其何等の法たるやを知らず。然れども統計にて顯象の原因を搜らんとするは猶木に縁つて魚を求むるがごとし。西洋大家の中にも、道德統計にて人意の自由を探求せんと企てし人なきに非ず。治療統計テラピューチクにて方藥の効能を覗知せんと望みし人なきに非ざれども、皆今の學者の屑とする所に非ざるなり。」と論じ、「統計の理法たるや、或る徵候即ちシュワイグの所謂分性に就て物を計へ、之を統べて數門とす。」とそ(四十三)の積極的見解を披歴している。

以上の如き鷗外の論文を讀んだスタチステック社幹事今井武夫は、七項目に分つて反論に努め、特にスタチステックを以て「現象の原因を知らんとするは木に縁て魚を求むが如し」を杜撰の暴言と極めつけ、「原因を探る能はずして法則の存するところを知るを得んや凡ての科學に法則なきはなし其法則は原因結果より出で來るものにはなきか論者少しく學問上の順序に注意したらんには思ひ半ばに過ん然して斯學の方法に由りて原因を探求し法則を發見し得たるもの古來鮮少にあらざるなり」と反論した。(四十五)

ところが鷗外はそれに對して、「統計は方法なり。故に是を應用するには到る處に其地面なからずやは。統計すべき材料によりて統計の難易は生ずる事言ふまでもなし。……統計方法といふ金錢にて買ふべからぬものは世にありとも覺えず。」と反論、「古今統計家相互の間に起りし爭論は、獨り今井君と余とのみならず、理論を主とするものは、計數を主とするものと罵りて表奴 Tabellenknecht といひ、これはかれを罵りて無味の饒舌者 fade Schwätzer といひ、……今其源を窺めて見れば畢竟旗鼓相對したる人々が、材料と方法との差別に心付かざりしなり。古今の統計家は固より彼の百數十家に止まらざるべけれど、要するに材料をして纏勝せしめた古義家と、方法をして偏勝

せしめし新義家のほかに出でず。……余は寧ろ古義を棄てて新義に就かんとす。」と述べ、統計學の性格として、  
 「統計は一つの理法なり。理法は何れの處にても應用すべきものなれば、統計に専門家はあらずもがたと云はんか。是れ決して然らず。言語の統計は語學家に打ち任せ、疾病の統計は醫士に打ち任せて善からんなれど、國家學のある區域にて計數を役すること尤も多き所にては、専門の計數的國家學者即ち所謂統計家を置くこと必要なべし。」と  
 (四十七)  
 (四十八)  
 その統計家の存在價値を認めつつも、統計を理法、方法とみる點外にとつては、あくまで

「(1)統計は以て原因を探求すべき方法に非ず。

(四十九)

(2)統計の方法にて探求したる法則は決して因果と關係するものに非ず。」  
 であつた。

従つて「統計家の曰く、産男の推數は〇・五一なりと。是れある所にて、ある時に得たを計數に依れば一千の産數中に五百十五人の産男ありと謂ふに過ぎず。この〇・五一五の推數は果して何の原因ありて然るや。統計家はこれを示すこと能はず。渠は又産男の推數の何れの國にても未來永劫〇・五一五なるを證すること能はず。他年此數の變ずることもあるべし。その變じたるや、統計家は又その何の原因あつて變じたるを知ること能はず。到底原因といふものは統計法の得て探求する所にあらざるなり。」<sup>(五十)</sup>であり、又「醫中の統計家云く、某國の軍隊は兵に給するに麥飯を以てし、復米飯を喫せしめず。然るに統計表に徴するに、その頃より脚氣病の比例數若干%減ず。是れ「給麥」の原因にて「防脚氣」の結果を得たるなり。即ち知る脚氣の原因は米飯にあることをと。その説理あるに似たれど、「防脚氣」の成積は「給麥」と同時に起りたること明らかなるのみにて、これより直ちにクム・ホック・エルゴオ・プロテル・ホックとは謂ふべからず。若し夫れこれを實驗に徴し、即ち一大兵團を中分して、一半には麥を給し、一半には米を給し、兩者をして同一の地に住ましめ、爾他の生活の状態を齋一にして、食米者は脚氣に罹り、食麥者は確

らざるときは、方纒その原因を説くのみ。是れ亦統計の原因を示さざる一例なり。<sup>(五十一)</sup>と考えるのである。

かくて歐外にとつては「統計は人の實驗を催起して間接に原因を探求するに至ることあるべけれど、統計其物は決して原因を探求すること能はざる」<sup>(五十二)</sup>ものであり、「統計は實に事定を拮據すれども、原因を探求せず、事實と原因とは、固より全く相殊なればなり。」<sup>(五十三)</sup>と強く確信するのである。

- (三十五) 森 鷗外 統計に就て 八九頁 鷗外全集著作篇第二十六卷所收  
 (三十六) 同右 八九―九〇頁  
 (三十七) 同右 九〇頁  
 (三十八) 同右 九〇―九一頁  
 (三十九) 同右 九一頁  
 (四十) 同右 九二頁  
 (四十一) 同右 九三頁  
 (四十二) 同右 九三頁  
 (四十三) 同右 九三頁  
 (四十四) 同右 九三頁  
 (四十五) 今井武夫 統計に就て スタチスチック雑誌 第三十七號 二五八頁  
 (四十六) 森 鷗外 統計に就ての分疏 一〇三頁 鷗外全集著作篇第二十六卷所收  
 (四十七) 同右 一〇三―一〇四頁  
 (四十八) 同右 一〇四頁  
 (四十九) 同右 一〇七頁

(五 十)	同 右	一〇八一—一〇九頁
(五 十一)	同 右	一〇九頁
(五 十二)	同 右	一一〇頁
(五 十三)	同 右	一一〇頁

## 五

以上の鷗外の所論に對してスタチスチック社幹事今井武夫は「再び統計に就て」と題し自己の所説を述べた。この論文につきスタチスチック社幹事河合利安は「左の一篇は今井自ら明言せらるゝ如く氏一家の持論にして固より社説を代表せるものに非ざれば其心して讀み玉はんことを但余輩も此事に就ては多少の所思なきにあらざれども开は今後の成行に任すこととし茲には一つの助言を加へずと云爾」と斷書が記されている。(五十四)

さて今井武夫は鷗外の前論文の主旨は概括すれば次の如くであるとした。すなわち、

(一)スタチスチックは科學にあらざり方法なり

(二)スタチスチックは統計といへる譯字にて意義通ぜり

(三)スタチスチックは原因を探り法則を知り得べきものにあらざり

今井は(一)に對して、「スタチスチックは人間社會の現象を研究する科學なり然して其應用上より方法となることあり廣義に用ひらるゝと狹義に用ひらるゝとに由りて此區別を生ず方法たる場合(廣義)他の科學を補助し又は應用せられたる時、科學たる場合は(狹義)獨立して人間社會の現象を研究し其原因規律を探索する時なり」として(五十五)

及マイヤーの所説を引用して立論し、

(二)については、「統計といへる語には合計といへる意味の外なし支那の書に併列し來りて甲何箇乙何箇「統約」何箇といふことあり彼の王韜が普法戦記にも歐洲大國の兵員を擧げ歩兵何人砲兵何人「統計」何人と書せし箇所數多あり又世に行はるゝ英華字典に就いても Sum の字の譯を見るに共計、合計、合賑、總賑、「統計」、「統算」總共、合共とあり、Total にも共係、共計、共算、「統計」、「統算」、とあり即ち統計といひ核算といひ悉く「シメテ」といふ意に用へり馬琴の著作裏見葛の葉と題する書の目錄の部に卷一何々卷二何々とし終りに統計(「ツガウ」と假名を附し)五卷と書けり是等も據る所あるを知るべし唯「統」の字形立派に見ゆれども意味は合の字と異なることなし苟も人間社會の事實を研究する科學の定義に如何に言語に乏しとはいへ合計學とは隨分情けなき次第ならずや」と辨(五十六)じ、

(三)に關しては、「スタチスチックは何故に法則を知り能はぬか何故に原因を知り能はぬか」と設問し、「或一定の年時に於て一定の領域内に於て産男の計數は千につき五一五の割合なるを探索し年々歳々同一の事實を得然るときは其地の出生は常に男數女數に超過する法則を知る延びて同一の方法に依り全體に及ぼし同一の結果を得るときは此法則は益々確定すべし近來進んで男數女數に超過するの原因を研究せり(父母の體質により)又某國の兵卒全體を同一の有様を保たしめ之れを二分して一方には米食せしめ一方は麥食せしめ脚氣病に罹る者米食者多く麥食者に無きことあるべし此調査を久しく積まば米食者は脚氣に罹り麥食者は罹ることなしといふ法則を知る又進んで脚氣病に罹る者は米食者に多しといふ原因を知り得べし」と論じ、更に「其他死亡事實を年齢の關係、配偶の關係、職業の關係、物價の關係等と出生の事實を經濟上の事項と相連絡して探索するときは種々様々なる影響を見る從つて原因を探り得べく法則を定め得べし勿論假定的のものなきにあらざらず然しながら假定的ものは遂に確定するものにして法則にあらざらずべきものにあらざらず」として、(五十八)鷗外説に對して次の如き修正案を示した。

「(4)總ての法則は因果の關係より發見せらるゝものなり

(四)スタチスチックの法則も亦因果の關係より發見せらるゝものなり」(五十九)

これに對して鷗外は湖上逸氏の署で「統計三家論を讀む」と題して、「今井武夫と名乗り玉ふ人は、蓋し一人にはあらざるに似たり」として「前今井氏と後今井氏とを區別することの止むべからざるを見る」と論じ、前今井氏、森氏、後今井氏との三家論を比較一覽表に作成して今井氏の論理的不一致を指摘してこれに對した。

「紫詮氏や曲亨翁が統計といふ熟語を合計と同義に使ひしが爲に、スタチスチックを統計といふは非なりとの説」に對して、鷗外は「奇なる哉論や。……宋儒の理學といふことを東洋の學者は會て唱えたれば、此意義に非ざるフ

イジックを理學とは譯す可らず。又漢土にては明代まで砒石の異名を食鹽と唱へたれば、此意義に非ざるクロオル・ナトリウムを食鹽とは譯すべからず。又經濟の二字は抱扑子が經世濟俗と唱へて、政治を總べたる語より出でしと云へば、決して今日の定義儼然たる經濟學には附すべからず。また衛生の語は老聃が衛生之經と唱へて無爲の域に韜晦

することを指したれば、決して今日の保健防疫の學には附すべからず。豈窮屈ならずや。」(六十)と反論し、更に「後今井

氏がリュメリンが「スタチスチックは人間社會の一般の學科に對して理法的の補助學 *Hilfswissenschaft* となるも

の」といへるを擧げてリュメリンが統計を理法視せずして科學視したる證とせしことに對して、「リュメリンが此言は偶以て其統計を理法視したるを見るに足れり。渠が、「理法的の」と云へるは扱て置き、渠は此句にて統計の特立科學に非ずして補助學なるを明らかにせんと思ひしなり。」(六十一)と反駁した。

以上の論争の末、鷗外は明治二十二年湖上逸氏と署して「統計の譯語は其の定義に負かず」と題するいわば總括的敘述をなしているが、鷗外の統計觀を單的に示している箇所についてみれば次の如くである。

「苟も統計を以て方法的補助學となし、其精髓を複體觀察(大量觀察のこと―筆者註)の方法に歸したるものは皆

(六十二)

多少、これを理法視せり。「余の統計の事を論ずるや、初より一定の用語例あり。是れ余が平素の慣熟する所なるを以て、一々に之を辨明せざりしのみ。(一) 特立科學 selbstständige Wissenschaft (別に差別の必用を感じざるべきは科學と稱す)とは或る方嚮に向つて物の特性、特機(必有の性、必過の機)を確定し、一定不變の法則を發明すべきものを謂ふ。(例へば哲學、化學、醫學。)(二) 應用科學 angewandte Wissenschaft とは特立科學を或る比較的小なる區域に應用し、以て物の特性、特機を確定し、一定不變の方則を發明すべきものを謂ふ。(例へば法理哲學、農事化學、裁判醫學。)(三) 方法 Methodik とは一定不變の法則に従つて諸科學的の目的を達せんが爲に用ゐる手段 Verfahren なり。語を代へて之を言へば、理法的(論理學的)方便なり。又單に理法なり。」とその所見を述べ、次でエンゲルを引用して、「統計(汎言すれば計數)はその本體、一理法なり。エンゲルは之を呼んで「複體觀察の方法」となせり。唯渠は、「(一) 此複體觀察に依りて人間集團及び其一定時内の制度の狀態を記述し、(二) 此狀態及び其制度の變化を同法により剖析説明」せんとせり(統計學論)。渠は其(理法の)發揮しきたれる知識 die sich hieraus ergebende Erkenntniss をも併せて之を包括せんとせり。然れども此般の知識は、固より「人間集團及び其一定時間内の制度の狀態及び變化に局促すべきに非ず。之を法學に應用し、醫學に應用すべし。蓋し之を施すべき原野は極めて廣漠なり。夫れ統計法を以て人間集團及び其一定時内の制度の狀態及び變化を探求するものは―他の統計法の探討と同じく―決して物の特性、特機を確定すること能はず。一定不變の法則を發明すること能はず。その確定する所は物の各性、各機なり。其發明する所は推測的結果 Wahrscheinlichkeitsregel のみ。マイルの所謂「合法」Gesetzmässigkeit のみ。コッチンゲンは「經驗の法則」と名け乍ら、之を「天則」及び「社會則」等の外に置きし者のみ。吳秀三君の所謂「規則に適ひしこと」Regelmässigkeit のみ。故に余は曰く、エンゲルの所謂統計は理法たる統計の一應用區域のみと。また曰く、統計(特立及び應用の)科學に非ずと。」(六十四)

最後に統計學の本質とその通用範圍について單的に、「夫れ統計は其本體、理法なり。而して凡そ理法區域内に在るものは萬般の科學の使用に供すべくして必ずしも或る目的（例へば社會的生活の檢尋）に於てのみ之を私すべきものにあらず」とその積極的見解を披瀝したのである。

以上縷縷鷗外の統計觀を引用したが、彼こそ統計學を方法論的立場より把握認識した日本最初の一人であろう。明治二十年代初頭「統計學」は殆んど國家の顯著事項を記述する、いわば國家學の一部門として考えられた時代に、以上述べた様な見解を披瀝し得た者が果して幾人いたであらうか。

とはいえ、その後も鷗外的立場は主流たり得ずわずかに大正時代の末期に至り始めて方法論的立場の所見が統計學界の主流を占めるに立つたのである。その理由は單にわが國資本主義の發展段階が低位にあつたというだけで解明盡されるものではない。

本考においては、ただ事實について述べたにとどまる。森林太郎がどの様な經路過程によつて統計學に對して方法論的立場をとるに至つたかの考證は他日稿を改めて考察することにした。

- (五十四) 河合利安 スタチスチック雜誌 第三十九號 三五九頁
- (五十五) 今井武夫 再び統計に就て スタチスチック雜誌 第三十九號 三六〇頁
- (五十六) 同 右 三六三頁
- (五十七) 同 右 三六五頁
- (五十八) 同 右 三六五頁
- (五十九) 同 右 三六六頁
- (六十) 森 鷗外 統計三家論を讀む 一一六—一一七頁 鷗外全集著作篇第二十六卷所收

- (六十一) 同 右 一一八頁
- (六十二) 森 鷗外 統計の譯語は其の定義に負かず 一四〇頁 鷗外全集著作篇第二十六卷所收
- (六十三) 同 右 一四一頁
- (六十四) 同 右 一四一—一四二頁
- (六十五) 同 右 一四二頁